

子どもの心と向き合う

「子育て」はいつの時代にあっても、親のいちばんの関心事です。特に、幼児期における親と子どもの関係は、その子の将来の人間形成にも非常に大きな影響を与えます。今月は“子育ての基本”である「子どもの心と向き合う」ことについて考えます。



「幼稚園でヒヨコが生まれたの」

五月のある午後のことです。雄太君（4歳）が、目をきらきらと輝かせて居間に飛び込んできました。

「お母さん！ あかね。ヒヨコが生まれましたよ。とつてもかわいくつて……」

その声は大きく弾んでいました。

実は、今日、雄太君の通う幼稚園でヒヨコが生まれました。その瞬間を間近で見た雄太君は、生命誕生の神秘と生まれたてのヒヨコのかわいらしさにとっても感動し、その思いを大好きなお母さんに伝えたくて、胸がドキドキしていました。

母親の由美子さん（32歳）は、ちょうど

取り込んだ洗濯物を畳んでいる最

中で、一歳

半になる妹

の美咲ちゃんが由美子さんにまわりついでいます。

「雄太。お母さんね、今ちよつと忙しいの。後で聞いてあげるから、ちよつと待っててね。……あッ、美咲ったら！ せっかく洗濯物を畳んだのに……。いつまでたつても片付けが終わらないじゃないの、もういいかげんにしてよ」



pho. オリオンプレス



いたずら盛りざぶの美咲ちゃんは、何でもかんでも口に入れたり、手でつかんでは

放り投げたりと、好奇心きうしん旺盛わんせいで片時も目が離せません。今も、由美子さんがちよつと目を離したとたん、「キャツキャツ」と嬉しうれそうに洗濯物を散らかしてしまったのでした。

「お母さん、今日、幼稚園で……」

雄太君はもう一度話しかけようとしたが、由美子さんは美咲ちゃんに手を焼いている様子です。

「雄太、美咲をあっちの部屋へ連れて行って遊んでやってくれない。ね、お願いだから」

「……ウン、分かった」

それからしばらくして、洗濯物の片付けが終わった由美子さんが、子ども部屋に行ってみると、雄太君は美咲ちゃんと

いっしょに塗り絵をしていました。

「雄太、お母さん、やっと用事が済んだわ。さっきの話なあに？ お母さんに聞かせて」

「うん、……もういいや……」

雄太君はポツリと言いました。その心は、すっかり由美子さんから離れていました。

子どもの心の声に耳を傾けよう

親は、家事や育児に忙しく追われていると、幼い子どもの話しかけに対して、つい「フン、フン」と生返事をしながら聞き過ぎたり、「忙しいから、後でね」と後回しにしてしまうことがあります。しかし、子どもの話しかけは、その内容（事柄）を伝えるよりも、感情（気持ち）を伝えたくて話しかけていることが

多いのです。子どもが勢い込んで話をしたいときに聞いてもらえないと、もう後で話す気持ちにはなりません。忙しくても、少しの間手を休めて、子どもの言葉の奥にある心の声に耳を傾けてあげたいものです。

—*—

「あのね、今日、幼稚園でヒヨコが生ま

れたんだよ」

「あーら、ヒヨコが生まれたの」

「とつてもかわいいんだよ」

「そう、とつてもかわいいのね。雄太、

抱きたかった？」

「ウン。でもまだだめだつて、園長先生えんちょうが言ったの」

「園長先生がだめだと言ったのね」

「もう少し大きくなつたらいいんだつて」

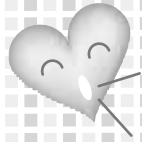
「早く大きくなればいいのにね。大きくなつたら、お母さんにまた教えてね」

—*—

このように、子どもの気持ちを受けとめて、できるだけ言葉を繰り返してあげると、自然と話が続きます。聞き上手なお父さん・お母さんになってあげること

で、親子の温かい心の交流は広がってきます。





温かな言葉 明るいリズム 柔らかかな言葉

「いま家庭には、子どもの話を聞くことが不足している」と言われます。言葉に出さないと、夫婦であれ親子であれ、その心は伝わりにくいものです。夫婦の間、親子の間での会話を増やしていくことが、家庭づくりの基礎となります。

長年、幼稚園園長として幼児の心の教育に尽力されたKさんは、毎月書き記した「園だより」の中で、子どもへの話しかけについて次のように述べています。

「両親からの温かな話しかけは、子どもの

心に愛と信頼の心をはぐくんできていきます。

言葉には、人が生きていくために重要な二つの役割があります。一つは『感動を相手に伝える』こと。もう一つは、『用件を相手に伝える』ことです。

ところが、最近の親は、第一の『感動』を伝えることが軽くなって、第二の『用件』を伝えるほうを重くする傾向が強くなってきたように思えます。そうになると、どうしても言葉数が増えて、『ああしなさい』『こうしなさい』という押しつけの言葉になっていきます。そして、その結果がうまくいかなないと、『あれはダメ』『これはダメ』『何してるの、早くしなさい』という責める言葉となり、さらに自分の『怒りの感情』というおまけまで付いて、ガミガミ型になってしまうのです。



子どもへの話しかけで大切なことは、
「温かな言葉・明るいうリズム・柔らかな言葉」です。親は、言葉が相手に感動を与え、愛を伝えるためにあるという大切な本質を心にとめて、子どもたちと接していきたいものです。子どもの心を満たす言葉がけ、話しかけをしましょう」

私たちは誰しも温かい言葉、優しく思いやりのある言葉をかけられると嬉しいものです。とりわけ、親の愛情のこもった言葉は、幼い子どもの心に大きく響きます。

子どもの心の声に耳を傾けて、「温かな言葉・明るいうリズム・柔らかな言葉」で子どもたちに語りかけてあげてください。きっと子どもたちの輝く笑顔が返ってくるでしょう。

真理ちゃんの 絵本

高等学校で教鞭きょうべんをとり、最近定年退職よしだつしむした吉田勉きちだつむさん（60歳）の話です。

吉田さんの長女・真理まりさん（35歳）が二歳のころ、奥さんが病気で半年ほど入院したときの出来事です。

真理ちゃんは絵本が大好きで、いつも寝る前に奥さんが絵本を読んであげていました。ですから、娘むすめが寂さびしい思いをし

ないようにと、吉田さんも寝る前には必ず絵本のお相手をしていたそうです。

「真理は、特に『桃太郎ももたろうの鬼征伐おにせいばつ』の絵本が大好きで、繰り返し、繰り返し読まれました。そのために絵本が傷いたんでロボロになってしまっただけです。

そこで、日曜日に近くの本屋に行って、新しい別の桃太郎の絵本を買ってきました。さっそく娘に、『桃太郎さんの絵本、買ってきたよ』とその絵本を手渡すと、娘は嬉うれしそうに、『早く読んで、読んで』とせがみました。



ところが、読み進めていくうちに、真理の笑顔が消えて、なんとなく不満そうな様子です。私が「どうしたのかな」と思っていると、突然大きな声を出して、『これ違う!』と言いだしたんです。私が、『どうして?』 桃太郎さんの絵本だろ』と言つても、『違う、違うよお』と駄々をこね、『これ桃太郎さんの顔してない』と言つて泣き出してしまつたんです。どうも前の絵本と絵が違うので、それが気に食わなかつたんですね」

困り果てた吉田さんは、前の絵本と違うけれど、同じ桃太郎の絵本であることを分からせようと思ひ、隣の部屋にあつた傷んだ古い絵本を取りに行きました。そして再び部屋に戻つてくると、思いもしない光景を目にしました。



子どももの心と 向き合うとき

「驚きました。娘が泣きながら、新しく買ってきた絵本の表紙をビリビリと破いていたんです。思わず「真理、何してんだ。やめなさい！」と叱りつけようと思いました。

しかし、のどまで出かかっていたその荒い言葉をぐつと飲み込んで、娘の顔を見つめていると、ふと「あの絵本は、いつも母親が読んでくれていた絵本だから、よほど好きだったんだな。娘も母親のいない寂しさをあの絵本を読むことで



我慢して「いたんだ」という思いが込み上げてきたんです」

吉田さんは、泣きじゃくる真理ちゃん
の頭を撫でながら、「お母さんが読んでく
れた絵本じゃなかったから、真理は悲し

なくなったんだね……。でも、破れた絵本もかわいそうだよ」と優しく声をかけたのでした。

目を真っ赤に腫らした真理ちゃんは、小さくうなずきました。吉田さんはニツ



コリとほほ笑むと、今度は、絵本の表紙を手でさすつて、「かわいそうに、かわいそうに……。痛かったね」とつぶやき、小さく切った障子紙に糊を付けて表紙を直しはじめたのでした。

吉田さんは懐かしそうに語ります。

「すると、それを見ていた娘が、何を思ったのか、『紙、紙』と言うのです。はさみで適当に切った紙を渡すと、今度は『のり、のり』と言います。私が、『手伝ってくれるの?』と聞くと、『ウン』と言いました。娘の手は糊でベタベタになり、畳や服にも糊がついて後始末が大変でしたが、私と一緒に絵本を直してくれたんです。そして、これには後日談があつて……」

数日後、吉田さんが学校で授業を始めようとしたとき、教科書が糊でくっつい

てページがめくれません。よく見ると、破れたページが新聞紙の切れ端で糊付けされていました。真理ちゃんがいつの間にか直してくれていたのです。

「糊付けの教科書には参りましたが、直そうとした娘の気持ちが嬉しかったのです。もし、あのとき絵本を破ったこととがめて感情的に叱っていたら、娘の心には、〃本を破つたらもう絵本は買ってもらえない〃という気持ちしか残らなかつたでしょう。破れたら直そうという積極的な発想や絵本を大切に作る気持ちにはならなかつたと思います。娘の心の声が聞こえたおかげで、私の怒りの気持ちがすつと静まったのだと思います」

吉田さんは、当時のことを思い出しながら、親が子どもの心と向き合い、子ども



もの心を感じるこの大切さを語ってくれました。

「見守る」ってなんだ

臨床心理士として、若いお母さん方の子育ての悩みを聞いてこられた滝口俊子さん（放送大学教授）は、親子のかかわり方について次のように話されています。

「子どもを叱ったり、注意したり、論じたりして分かせようとするのが、『教育』とか『教える』といわれることです。それに対して心理臨床では、教えて学ばせようとするのではなく、『子どもが本来もっている成長力を尊重して、見守っていきましよう』と考えます。（中略）

駄々をこねる子どもを例にとつて『見

守る』とはどういうことを考えてみましょう。駄々をこねて道端に寝ころがってしまった子どもを前にすると、多くのお母さんはきつと、『なんて恥ずかしい』『どうしてこんな態度をとるのかしら、情けない』などと思われるでしょうね。

（中略）

主観の入らない目で見るのが『観察』であるのに対し、心のかよった温かい目で、『この子はこういう気持ちでこうしているのだろう』と察するのが『見守る』ことです。駄々をこねるといふ“問題”



を悪いことだと決めるのはマイナスの評価ですが、「問題」には必ずプラスの意味も隠れて（かく）います。『見守る』ことによつて、それを見つけられるようになると思います。『今、この子はこういう気持ちなのだろう』と、お母さんが自分の感性（かんせい）のすべてを総動員（そうどういん）して対応していくこと——これが、親子のかかわりの第一歩だと思えます。

たとえば、『この子には何かが欲しい（あるいは嫌だ）』という意思があるんだな』とか『その意思をなんとか表現しようとしているんだ』という意味を読み取ります。そんなふうに「問題」の意味を見

つけられたら、優しく抱きしめて、『欲しい(嫌だ)』と思ってるあなたの気持ちには分かったわ』としつかり受けとめてい
ることを伝え、そのうえで『けれども、
こんなふうに寝ころがるのはこの場にふ
さわしくないことなのよ』と伝えていき
ましょう。(中略)

お母さん(保育者)に個性があるよう
に、子どもにも個性があります。『見守
る』ことで見えてくる個性を大切にはぐ
くんてください』

(NITコミュニケーションズ「子育てを応援
するコミュニケーションサイトe-mama」より
<http://e-mama.ocn.ne.jp/>)

「子育て」とは、単に身体的な成長だけ
を指すものではありません。それは、子

どもの健全な心と体を育てることです。
とりわけ「心」を育てることは、親の大
切な役割であり、大きな責任の一つだと
言えます。

ところが、家事や育児に忙しい毎日を
送っていると、親は時にイライラして、
子どもの心を疎かにしてしまうことがあ
ります。そうしたときこそ、心にゆとり
を持って、「見守る」ことを心がけたいも
のです。

子どもを見守るためには、親が子ども
の心としつかりと向き合い、その心の声
に耳を傾けていくことが何よりも欠かせ
ません。これは幼児期の子育てだけに重
要なことではなく、子どもがいくつに
なっても、親が忘れてはならない「子育て
の基本」と言えるのではないでしょう